

高所に「残された人々」に……

9月6日、イギリス山岳会会長、およびコミッティー・アルパイン・クラブの名で、「山における死」と題し、以下の前文を添えた文書がEメールで届きました。

「われわれは、しばしば英国のメディアから山における“死”についての意見を求められており、添付の文書を作成しました。これはプレス声明として英国の雑誌に載せられます。

つきましては、内容をご検討いただければ幸いです。貴会の反応をぜひお知らせください。コメントを歓迎します。われわれはこの主題についてのいかなる議論にも大いに興味があります」

高山で遭難したクライマーの遺体に関するアルパイン・クラブの見解と提案ですが、一昨年のエヴェレストにおけるマロリーの遺体発見時のメディアの扱いに関連するものと考えられます。

これは英国山岳会のみならず日本山岳会、会員すべてに問いかけられた「重いテーマ」だと思われますので、英国山岳会の見解を全文掲載するとともに、海外の登山情報に詳しい江本嘉伸会員に近年の状況を解説していただきました。

なお、同文は世界71カ国の山岳会に発送されたとのことですが、翻訳は当会海外委員会の中村保理事によるものです。

遭難死した仲間の遺体を事故の直後に収容することはしばしば不可能である。特にヒマラヤや世界の高峰においては困難である。最近いろいろな催しにおいて、辛うじて接近可能な高所に残されている多くの遺体のことが話題の焦点にされてきた。アルパイン・クラブはその現状について度々コメントを求められているので、クラブとしての見解を発表することにした。その内容が関係者にとって有益であることを期待する。高峰登山が活況を呈し続けている現状にかんがみ、アルパイン・クラブは

この問題について有意義かつ発展性のある議論の展開に役立つことを願うものである。

■遺体発見

クライマーの遺体の発見は心穏やかでない体験であるに違いない。遺体の存在する場所があらかじめ判っていても、実際に目の当たりにした時はショックであり苦痛である。ほとんどのクライマーは通常の感受性と常識をもって対応する。しかし、参加者が肉体的・精神的に限界に近い極度の困難な状況の中で行動する時は、いつも正しい判断・選択がなされとは限

高峰で死去したクライマーの遺体発見と収容について

英国山岳会



2001 年 (平成 13 年)
10 月号 (No. 677)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円

目次

高所に「残された人々」に……… 1	報告
海外委・「ジャパニーズ・アルパイン・ニュース」創刊……… 5	
図書委・鎌倉古道を歩く……… 5	
科学委・気象講座「雲と前線」… 6	
自然保護委・フォーラムIN鳥海6	
総務委・ビールパーティー…… 8	
Climbing&Medicine・2……… 8	
東西南北	
ミッテルレギーヒュッテ改築計画の募金について……… 9	
カナダの山小屋生活……… 10	
メンビ・ユングフラウ連登…… 11	
不思議な地面模様……… 12	
俳句・月の山研……… 14	
渋沢登喜子著『剋岳』を読む… 14	
警察白書を読んで……… 14	
短歌・モンゴルの山……… 15	
図書紹介……… 17	
『日本アルプスの発見』『甘利山』『富山県山名録』	
支部だより……… 18	
富山支部 信濃支部 秋田支部	
Sanken Life……… 19	
アメリカにおける登山助成金… 20	
INFORMATION・会員異動…… 23	

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日… 10~18時

らない。遺体の収容をできなかった時は、クライミング仲間にも苦渋と悔恨が残る。収容が可能ならそうすべきだが、収容することが終わるわけではない。亡くなったクライマーの遺族や友人の気持ちを慰め元気づけるためにやるべきことは数多くある。

山で逝ったクライマーの遺族や友人の深い悲しみをいささかでも軽く考えてはいけない。遺体がないことが悲しみと心痛をより深くすることはつとに立証されているところである。事故を引き起こした時の状況や遺体の場所に関する詳しい知識の欠如は、悲しみを一層深くする。したがって、遺体を

発見することは遺族、友人そしてクライミング・コミュニティへの重要なサービスを提供することになる。

アルパイン・クラブは以下の行動をできるところから実行することとを推奨する。

一、遺体のある正確な位置を確認し、その位置を示す地図を用意する。

二、遺体の特定をするために必要な範囲で、衣服を注意深く調べる。その後、当人の個人的な所持品を回収する。

三、カメラ、日記、ノートブック、写真、手紙、その他の個人的なものを取り出し、家族のもとに返す

ために袋に入れる。

四、記録を保持する目的で、心をこめて遺体とその場所の写真を撮る。行き過ぎない程度に、遺体の特定に役立つであろう衣服と装備の写真を細かく撮る。

現場の山から戻ったら、直ちに亡くなったクライマーの特定をしなければならぬ。その作業は、多くの団体や情報源、特にアメリカン・アルパイン・ジャーナル、ヒマヤン・ジャーナル、アルパイン・ジャーナル、アルパイン・クラブのヒマヤン・インデックスの助けを借りて進めることができる。

すべての個人の所持品、写真およびその他の情報は、メディアに提供される以前に遺族に渡さなければならぬ。写真を報道関係者に配信するにあたっての決定は、遺族の意思に委ねられるべきである。

■遺体の収容

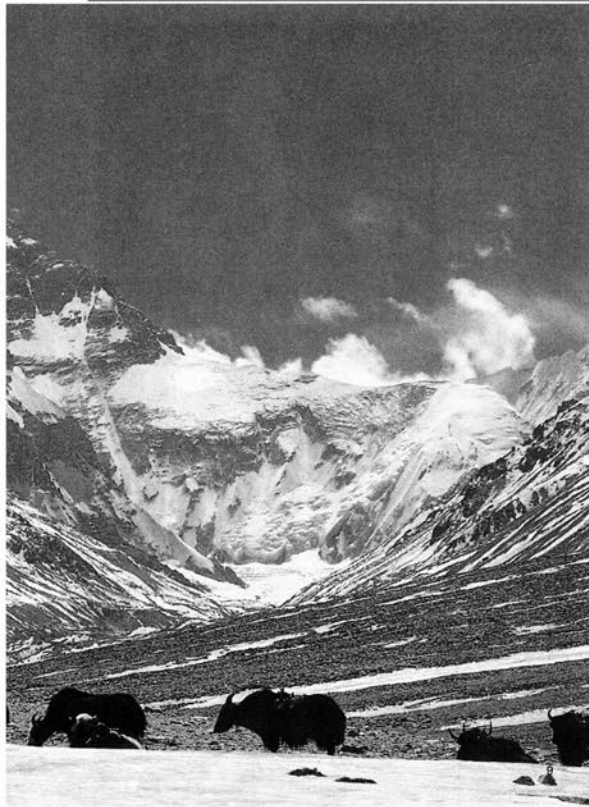
高所から遺体を収容するのは決して容易ではない。極限的な高度と場所が、収容をほとんど不可能にすることもある。初めの悲劇がさらなる人命の喪失をもたらさないことが大事である。とりわけ、

土地の高所ポーターを巻き込むべきではない。損壊しやすい遺体を動かす際には、細心の注意を払うこともまた周知徹底されるべきである。多くの場合、高所では凍結していて動かすことは難しい。自制した注意深い行動が求められる。

遺体が発見され、確認され、その山にあるいは山の近くに埋葬された多くの例がある。アルパイン・クラブとしては、遺族が遺体を持ち帰ることを望まず、関係当局が協力してくれないならば、遺体は現地に静かに安置しておくべきと考える。

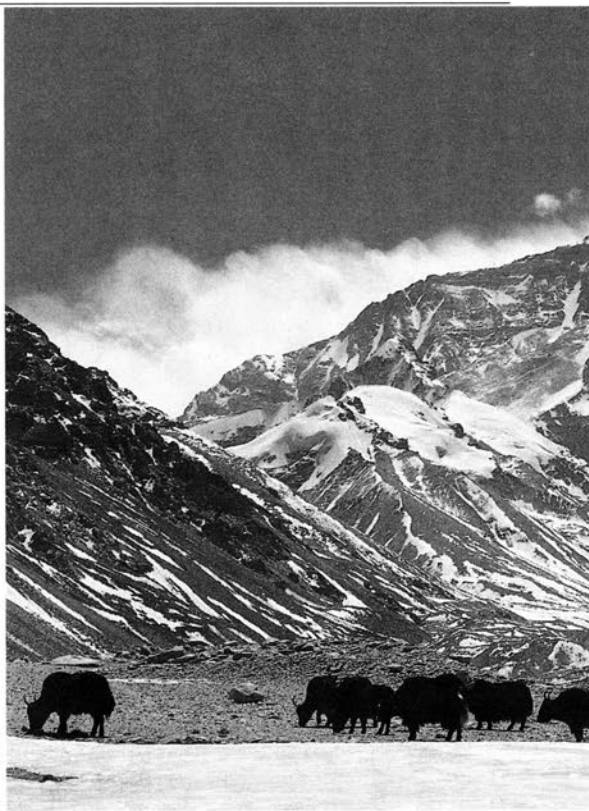
遺体のある場所が非常に遠くで接近が難しい場合は、遺体収容の成功の見込みはありそうもない。このような状況の時は、遺体を確認し、その場所に埋めるかカバーをかける措置のほうが好ましい、とアルパイン・クラブは提唱する。もしそれができなければ、遺体は安らかに静かにそっとしておくべきである。

しかしながら、一方においては遠隔の地であっても、クライマーが頻繁に遺体のある場所を訪れることでよく話題になっているとこ



サガルマタ三国友好登山隊報告書より

ろがある。エヴェレストへのルート上のサウスコル付近が特にその傾向が強い。その事実は国際的なメディアにより多々報道されてきた。遺体の写真の出版は遺族にとつては苦痛であり、他の人たちにとつても同様で、ひいては登山界の信用失墜に繋がることである。ネパールとチベットの中国当局は、他の国と協力してエヴェレストからクライマーの遺体を収容する明確な目的をもった遠征隊を組織することを検討してきた。アルパイン・クラブはこれらの提案を歓迎する。登山活動の増加は世界の高山での遭難死の増加を招くだろう。なかなく、極限的



エヴェレスト北面の全容 1988年のチョモランマ・

な生理学的かつ技術的挑戦を克服しなければならぬエヴェレストやK2の登山においては危険が大きい。国際的な登山界は、山に逝った人々の遺族に深い思いを馳せるとともに、この課題を認識し、対応するための行動を起こす必要がある、とアルパイン・クラブは信じる。この課題に一致して取り組む計画を推進するためには、専門の遺体収容チームの派遣が必要であり、そのための資金調達は欠かせない。アルパイン・クラブはUIAA(国際山岳連盟)が各国の登山団体と連携して、この課題に関する包括的で首尾一貫したポリシーを策定

するよう要請する。

悲劇的な出来事がセンサーショナルに扱われることなく、尊厳と自制と思ひやりを持った姿勢で表現されることが、遺族、友人、クライミング・コミュニティ全体

「解説」ヒマラヤ大衆化時代、もう一つの課題

江本 嘉伸

二十一世紀を迎えたヒマラヤ登山で、誰も予想しなかった状況が起きている。遺体の発見、遭遇、時にはやむを得ない放置である。山に登って人の死と向き合うことは、避けたことだ。まして、行動に制約が多いアルプスやヒマラヤでは。しかし、高峰登山の裾野が広がるにつれ、そういう事態が増えつつあり、時には遺体の写真がセンサーショナルに報じられたりしているのが現状である。

英国アルパイン・クラブ(英国山岳会)が今回、この「高峰での遺体」について異例とも言ふべき見解をまとめ、その内容を世界各国の山岳会にメールで伝えたことは、ヒマラヤで遺体にどう対処す

にとって大切なことであり、世間一般の登山のイメージに対して大事なことである。

二〇〇一年八月二十三日

ダグ・スコット会長

パトリック・ファガン副会長

マーチン・ラグ副会長

るのか、という問題がもう逃げられないテーマになっていることを示していると言えるだろう。この重いテーマは、毎年数多くの隊が海外の山に繰り出す日本にとつても、他人事ではない。イギリスからのメールは「貴会の反応を是非知らせてほしい」と附記しており、日本山岳会としても、会員個人としても対応が求められている。

ヒマラヤなどの高峰での死は、以前は永遠に神の世界に眠る、といったロマンチックなイメージでとらえられることが多かった。滑落、雪崩事故などで遺体が発見されないことがほとんどだったからだ。しかし、高峰に挑む人々の間口が広がり、挑戦者が増え続ける

現状では、遭難者の遺体は「登山道」の目につく場所に放置されるケースが目立ってきた。とりわけ一シーズンに数十の隊が入山するエヴェレストではその傾向が顕著で、あちこちに眠っている遺体の写真が雑誌に掲載され、センサーシヨナルだ、と批判を呼んだこともある。

できれば、遺族は遺体を収容したい。九六年五月、エヴェレスト公募登山隊に参加し、登頂を果たしながらサウスコルで力尽きた難波康子の場合は、翌年エヴェレストを訪れた夫の願いを登山隊のシエルパたちが聞き入れ、山麓までおろし、茶毘に付すことができた。しかし、八〇〇〇ㄱの遺体収容は、極度な困難を伴い、多くの隊がやむなく「静かに眠らせておく」のが、現実である。

九九年五月、アメリカの捜索隊によって、一九二四年に消息を絶ったジョージ・リー・マロリーの遺体が発見された時、その写真の公開や所持品の取り扱いをめぐる議論が起きた。捜索隊は事前にマロリーの遺族の了解は得ていたが、現実に発見、ということになると予期しなかった状況が起きた

のであろう。

マロリーの遺体発見は、彼らが登頂したかどうか、の結論を出すには至らなかった。決め手となる証拠がなかったのだ。マロリーとともにエヴェレストに消えた二十歳のアンドルー・アーヴィンは登頂の可否を証明するカメラを持っていたままだ可能性があり、マロリーとは別の価値あるテーマとみなされた。

アメリカのサイモンソンをリーダーとするマロリー捜索隊が、二〇〇一年になって今度はアーヴィンの捜索のために再びチョモランマを目指すことになった際、アーヴィンの遺族が組織するアーヴィン基金は英国山岳会を通して、発見後の遺体の埋葬、写真の発表の仕方などについて詳細な要望を出した。英国山岳会は、その内容を全面的に受け入れ、山岳会の見解として特別に文章にして一月二十三日付けで事前に公開した。

遺体には敬意をもって接し、後で石などで丁寧に埋葬すること、以後いっさい人の手にふれさせないこと、撮影した写真は遺族が確認し了解してから発表すること、所持品はすべてアーヴィン基金に

属すること……。

アーヴィンは見つからなかったが、英国山岳会は、高峰での遺体にどう対処すべきか、この機会に見解をまとめておくべき、と考えたのであろう。前掲の「見解」はその結果として生まれ、世界の岳人たちに配布されたわけである。

残念ながら、ヒマラヤには着実に「収容できなかった遺体」が増え続けている。九九年の捜索隊は、マロリーが発見された場所は「墜落したクライマーたちの、いわば溜まり場」で、計六人の比較的新しい遺体が見つかった、と報告している。この春、北側から登頂した早大生、石川直樹も八五〇〇ㄱ地点で遺体に遭遇し、衝撃を受けたことを書いている（「山と溪谷」八月号）。ほかの隊でも、遺体に遭遇し「足ががくがくした」経験を持つ登山家は少なくない。

山での遺体は、ヒマラヤに限らない。八月十五日には、アルプスのイタリヤ側、二七〇〇ㄱの水河でミイラ化した遺体が発見された。所持品の財布にあった名刺から、一九七二年七月、仲間六人でグランドジョラスの登頂に成功し

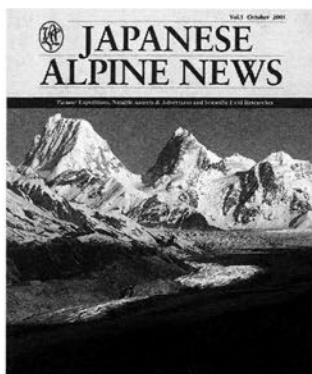
た後、下山途中浮き石をつかんで墜落死した東京在住の当時二十二歳のクライマーとわかった。二十九年の間氷河に眠っていたが、おそらく温暖化の影響もあって世紀を変えた年、あらわれたのである。遺体という存在は、原則として、他人にふれられるべきではない。しかし、登攀ルートに無残な姿をさらしているクライマーたちをそのままにしていはいはがけない。

ならば、どうすればいいのか。英国山岳会の四項目に及ぶ「遺体に遭遇した際の対応ルール」は、遺体の位置の確認、身元確認のための必要な措置など、かなり具体的な行動を「推奨」している。

ただし、発見者が疲労など極限状況に近い場合は、これは無理だろう。

同時に、遺体への接し方、見方は、国や宗教によっても違う。私たちひとりひとりの文化を問われることでもある。

生きている者の生命を最大に尊重しつつ、還れなかった者たちにどういった配慮をすべきなのか。辛い課題だが、高峰登山はそういう現実を考える時代にきている、ということなのであろう。



ジャパニーズ・アルパイン・ニュース表紙

報告

REPORT
10月

海外委員会

「ジャパニーズ・アルパイン・ニュース」創刊

「現在、日本から国外に発信される登山情報は極めて少ない。日本のアルピニズムは世界から孤立している」——昨年二月にJACの招待で来日したアメリカン・アルパイン・ジャーナル編集長の感想です。海外の著名な知日派の登山家から、日本発の情報が求められていることがつとに指摘されて

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

きました。そのようなニーズに広く応えるために、このたび海外向けの英文情報誌「Japanese Alpine News」Vol.1 October 2001を創刊する運びとなりました。年に一、二回の発行を計画しており、海外八十の登山団体および数多くの登山家に送ります。

掲載する内容は海外の登山家や山にかかわるフィールド・ワーカーにとつて価値のある、

- ①パイオニア的遠征
- ②記録に値する登攀と冒険
- ③科学的フィールド調査

に軸足を置きますが、それらのみ限定せず、環境問題や社会貢献の観点も視野に入れます。第一号(2001)では、次の記録と紹介を取り上げました。

●会長メッセージ(大塚博美) 日本山岳会の歴史とアルパイン・ニ

ユース発刊の意義

- チョナムスターグ、偵察と初登攀(児玉茂)——早稲田大学・稲門山岳会、西崑崙探索の記録
- カンリ・カンボ、東南チベット未踏の山群(中村保)——シルバー・タートル、学習院他
- メコン川源頭、発見と初下降(北村昌之)——東京農大探検部の記録と評価
- 十年間のマッキンリー気象観測(大蔵喜福)——日本山岳会プロジェクト
- ガンカルプンスムとリヤンカン・カンリ初登頂(伊丹紹泰)——個人隊
- ミニヤ・コンカ山群、レッドメイン初登頂(永田秀樹)——学習院大学山岳会
- 二〇〇一年日本山岳会海外登山基金(江本嘉伸)——ローツェ、ガッシャーブルム、サンルン
- 日本ヒマラヤ協会のデータ・ファイル(山森欣二)——二〇〇〇年の日本隊ヒマラヤ登山
- カラコルム・ヒンズークシユ登山地図(薬師義美)——ナカニシヤ出版、京都
- 二〇〇一〜二〇〇二年日本山岳会役員

第二号は二〇〇二年の四月を予定しております。会員の皆さまのご意見、アドバース並びに掲載する記録やニュースをご提供いただければ幸いです。(中村保)

図書委員会

第八回「古道を尋ねて」鎌倉古道を歩く

第八回目のJAC図書委員会主催による「古道を尋ねて」が、六月十日に実施された。

今回は平安時代に東海道として開かれたと推定される箱根—三島間を通る鎌倉古道を歩いた。箱根峠—三島間の旧東海道より約二キロほど西側をほぼ平行して通っている。古道として整備されてきたその道は、箱根外輪山の一角、芦ノ湖高原別荘地から三島市元山中まで約五キロである。高度差約六〇〇メートル、峠からはダウンヒルのハイキングコースである。快晴なら要所で素晴らしい富士を眺められるはずだが、梅雨入りのためガスで真っ白、コース入口を探し当てることも困難なくらいであった。

この古道は、古い五万分の一地図には尾根までルートが付いてい



霧の中の推定鎌倉古道を歩く

元山中には当時の関所跡石碑がある。全員で記念写真を撮り、三島駅へと里道を下った。参加者十二名。(林 栄二)

科学委員会

気象講座「雲と前線」

夏山シーズンを前にした六月二十七日、城戸邦夫会員を講師に、科学委員会の気象講座がルームで開催された。

観天望気とはよく聞く言葉だが、専門家でもないわれわれが、刻々と変化する雲からどうやって気象の変化を読み取っていいかわからない。今夏の山行に少しでも役立てばと思って参加した講座だが、充実した内容に、一日も早く夏雲沸く稜線に立ちたいと思ったのは、参加者全員の一致したところではなかっただろう。

最初に、雲について、その成立には上昇気流が必須であること、さらに、高度および湿度と気温減率との関係や、凝結高度(空気中の水蒸気が飽和に達し雲の発生する高度)、露天温度(空気中の水蒸気が飽和する温度)などいくつかの専門用語について説明があっ

た。

主題の「前線に伴う雲」では、「寒気と暖気がぶつかる」と前線が生じ、寒気が北西から暖気を押し下げ、暖気が北東に押し上げられることで寒気、暖気が反時計回りに回って、低気圧が発生する。低気圧の中心では上昇気流が生じ、さらに気圧が下がって低気圧が強まる。低気圧の前面には寒気の上に暖気が乗る形で温暖前線が、後面には暖気の下に寒気が潜りこむ形で寒冷前線が生じる。

温暖前線および寒冷前線それぞれの特徴は、雲の形状、雨量、降水時間、気温の相違といった観点から説明できる。温暖前線は層雲状の雲を伴い、その雨域幅は三〇〇キロ以上で、変化は少ないが、長時間連続的な降雨をもたらす。一方、寒冷前線は、積乱雲を中心とした集中的な雨をもたらす。その後寒気が入り込む。ただし、雨域幅は四〇〜五〇キロ程度しかないため、一〜二時間もすれば雨も上がるということであった。

前線の断面図を用いて、雲分布や雨域にまで説明がおよぶと、参加者からは活発な質問が寄せられ、司会者に進行を促される一幕も。

山行の成否を大きく左右するだけに、参加者の関心は高い。

締めくくりは、講師自ら撮りためた雲のスライド映写で、経験を織り交ぜた解説は説得力がある。特に、白馬山荘を定点とした八月のある一日の朝、立山側に積雲が発生した後の雷雲の消長は迫力があつた。

参加者一人ひとりが自らの山行を思い起こしながら、改めて観天望気の大切さを確認しあう貴重な機会となった。参加者二十三名。

(黒木 史子)

自然保護委員会

快晴に恵まれた フォーラムIN鳥海

八月十七(金)〜十九日(日)、山形県八幡町および遊佐町で「自然と人間の暮らしを考えるフォーラムIN」と共催で実施した「フォーラムIN鳥海」は、全国から約百四十名の参加を得て、盛況のうちに閉会した。初日のシンポジウム終了後は、登山・ハイキング・歴史散歩・撮影と思い思いに分かれて行動したが、両町はじめ地元会員の協力により、滞りなく目的を達す



全国から140名が集う「フォーラムIN鳥海」

ることができた。その概略を報告する。

第一日「イヌワシ・シンポジウム」

於・鳥海高原家族旅行村

当委員会は十年前「鳥海山南麓スキー場開発方法の変更を求める要望書」を地元八幡町へ提出した。その後イヌワシの存在が確認され、佐藤淳志会長を中心とした山仲間が生息調査を実施、(この間の事情は「山岳」九二に詳しい) 営巣地を発見した。九七年九月、開発

はついに中止となり、鳥海山の景観とイヌワシは守られた。委員会としてもまさに理想的な活動の成果を上げることができたのである。以上の経緯を司会(松本)が紹介した後、各パネリストの発言となった。

●後藤孝司会員 八幡町長として一時は開発推進の立場だったが、イヌワシ保護の観点からスキー場建設を断念した。現在では、イヌワシを守り、山の恵みを大切にする町づくりを目指している。

●佐藤淳志会員 郷土の山を破壊から守りたいと思った。何が何でも開発に反対というのではなく、公平な立場からまず学術的な調査をしようとしたことが、結果的には守ることに繋がった。調査にあたって関山先生のご指導に感謝している。

●関山房兵氏(環境省猛禽類保護センター担当官) イヌワシは原生林の住人ではなく、今や人間が切り開いた環境のパロメーターである。食物連鎖の頂点にある猛禽類を保護することは、そのために守られる環境によって人間もまた保護される。末永く共生すべく努力していこう。

引き続き活発な質疑応答があり、盛り上がった。(松本 恒廣)

第二日「鳥海山登山」

家族旅行村を午前五時に出発、

チャーターバスで一気に六合目滝ノ小屋まで。こんな便利な道路は要らないと言いつつ、三時間は要する登りを二十分ほどで到達してしまおうと、心の中では楽ができた、ありがたいと思う自家撞着。こんな心の葛藤にも自然保護の難しさを感じてしまう。昨夜のイヌワシ・シンポジウムの余韻から、いつもの登山とは違った期待感で登りにかかる。今年は雪の消えるのが早く、心字雪渓は頼りなさうに残っていた。予定外の藪こぎもJACのメンバーは楽しかったという。七五三掛から鉾立に降りる。

雲海と日本海と、頂上からの雄大な眺め、そしてチョウカイアザミ、チョウカイフスマなど高山植物の花々たち。残念ながらイヌワシには出会えなかったが、地元の皆さんの厚意に支えられ東北の名峰を堪能できた。(篠崎 仁)

「鶴間池・ブナの森コンサート」

鶴間池は鳥海山南麓のブナ林の中にある幽邃な場所。ハイキングで一汗かいた後は、池畔で開催さ

れたコンサートに聞き入った。

そのプログラムは、日本ではまだ珍しいコカリナ(木笛)の演奏、創作紙芝居「鳥海山のブナの森のクマさんからの便り」、フルート独奏、演劇・宮沢賢治作「注文の多い料理店」、それにマンドリンアンサンブルの演奏だった。いずれも自然環境に配慮した演出で、これらの音楽は森の生き物を脅かすものではなかったはず。紙芝居はかつてスキー場開発に揺らいだこの森でイヌワシ調査班の人々が出会ったクマの母子がモデル、「注文の多い料理店」はブナ林の奥で動物たちの報復を受けるハンターたちの話で、どちらも樹陰から森の仲間たちが、そっと覗いているような気がした。(近藤 緑)

「スライド「鳥海山の四季」他」

於・大平山荘大広間

二日目夜「トゥナイトIN鳥海」のトップを切って鳥海山の映写会が行われた。撮影者は昼の撮影会の案内役でもあった川嶋新太郎会員。フィルムビデオ委員である氏は、地元遊佐町に別荘を構え、同町の公民館で個展を開くなどライフワークとして鳥海山の撮影に打ち込んでいる。

多くの作品の中から五十枚の作品を厳選、ユーモアあふれる解説で見る者を十分楽しませてくれた。千畳ヶ原の新緑、鳥海湖畔の草紅葉や残雪をピンクに染めたアーベント・ロートの鳥海山などがスクリーンに映し出されるたびに、大広間いっぱいの人から感動の声があがった。

(大山 恭司)

同夜、会場には遊佐町長・小野寺喜一郎会員も出席、来年度開催予定の安曇野からの一行二十人も合流して、引き続き演奏された和洋音楽や演劇・森鷗外作「高瀬舟」を楽しんだ。

最終日、記念撮影の後、鉾立から鳥海山や象潟の海を展望して散会。快晴続きの三日間だった。

総務委員会

ビールパーティは大盛況

九月一日、日本山岳会ルームにおいて、ビールパーティを開催しました。予定を上回る五十四名が参加、用意しておいた七〇リットルの生ビールや寿司などのおつまみがきれいになくなりました。両副会長の挨拶以外は飲んで談笑するだけ、楽しく充実したひとときでした。

Climbing & Medicine・2

高山病の理解

中島 道郎

高山病は「病」とは書いても、ヤマイ (disease) すなわち体臓器の器質的变化ではなく、ワズライ (sickness)、すなわち臓器の機能的失調にすぎない。海拔およそ2000m以上の高所環境では、大気中の酸素分圧が低下することにより正常の生命現象がうまく保持されなくなる。つまり機能的失調状態に陥る。そのことを高山病というのである。

高山病には、急性高山病 (AMS)、高所脳浮腫 (HACE) と高所肺水腫 (HAPE) の3病態があるとされるが、その本態は要するに体内水分の分布状態と貯留量の異常である。異常は全身におよぶが、その症状の軽重は分布臓器と貯留量によって決まり、特に顕著な症状を呈する臓器は脳と肺である。貯留水分量が少ない間は軽い脳症状を呈するだけで、これをAMSと呼ぶが、貯留水分の増加につれて脳症状が顕著になってくるものをHACE、肺症状が強くなってくればこれをHAPEと呼ぶことになる。

要するに高山病の3病態とは、症状出現臓器と分布水分量の違いだけで、本質的には同

じものである。

高山病の症状は、高所に到達してから6時間ないしそれ以上の時間経過の後出現してくる (たとえば、ユングフラウ・ヨッホに上った旅行者が山頂駅でふらつき、むかつきを訴えるのは、過換気による一過性脳虚血であって、高山病ではない)。頭痛が必発で、それに悪心・嘔吐その他種々の全身的諸症状が加わるが、詳細を述べる紙面がないのでここでは省く。

高山「病」の治療法はない。あるのは下山対策のみ。大切なのは罹らないための対策で、初めて到達した高度にそのまま泊まることをせず、宿泊地と決めた地点からさらに200～300m上った後、降りて泊まる。これを「登高泊低」(Climb High, Sleep Low) の原則という。

またアセタゾラマイド (ダイアモックス) の服用は有効で、登山開始の前日から高所到達2日後までの4日間、毎朝1錠 (250mg) ずつ服用する。それ以後は高所滞在中、ズルズルと飲み続ける必要はまったくない。たとえばチベット旅行なら、ダイアモックス服用は、ラサ到着前日から到着の翌々日まででよい。また、ラサ空港からそのままホテルに直行するのではなく、バスでいったん近くの峠まで登り、引き返してホテルに泊まることを勧める。

飛行機でなく、ゆっくり日数をかけて高度を稼ぐ型の旅程の場合は、ダイアモックスも登高泊低の原則も不要である。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、原稿は長すぎないようにお願いします)



イラスト・宇都木慎一

ミッテルレギーヒュッテ 改築計画の募金について

村木 潤次郎

一九二二年、横有恒さんがグリンデルヴァルトのガイドたち(F・アマッター、F・シュトイリ、S・ブラバンド＝当会名誉会員)と組んで、アイガー東山稜(ミッテルレギー・グラード)の初登攀に成功されたことは、日本の近代登山史の幕開けを飾る偉業としてよく知られている。

この成功を記念して、ユングフラウ鉄道のアイガーレッチャー駅から氷河を渡って尾根に取り付く地点に、ミッテルレギーヒュッテは建設された。一九二四年のことであるが、その費用の大半を横

さんが負担されたことを知る人はあまり多くないようだ。

当初は十六床のこぢんまりした設計で、その頃のたたずまいについては田口二郎著『山の生涯 来し方行く末』上巻、エミール・シュトイリ(横さんに同行したF・シュトイリとは別人)の項に、マキヒュッテとして記されている。

その後、登山者が増えるにしたがって一九八六年、カマボコ型のビバーク用設備が増設され、管理人も置くようになったが、最近の激増ぶりには対応しきれず、ついに本格的な増改築計画が具体化するに至った。

この間のいきさつと、日本の登山界からも相応の応援を得たいという話が、当会会員でグリンデルヴァルト名誉村民であった小田稔

さんから渡辺兵力さんに伝えられた。昨秋の秩父宮記念山岳賞の審査委員会の席上であつたかと思うが、そのことは小田さんの追悼文『山』六七三号、竹内哲夫)にも記されている。また、本年二月、産経新聞に横さんの実績が九回にわたって連載されたが、その記事の一部にもこのヒュッテの建設の経緯と改築計画が詳しく記されていた(鈴木隆行記者)。

このような背景を踏まえて、横さんに親しくお世話になったゆかりの者たちが音頭を取って何がいかに応援をしなければということ、この企画が始まったのである。

しかし計画の詳細が分からないことにはどうにもならず、横さんのご子息恒治さん、ブラバンドさんの孫娘にあたるマルグリットさん(グリンデルヴァルト観光協会)らを煩わして現地でガイド組合の改築計画、資金事情を知ることができた。二月初旬のことである。以下、計画の概要、建設費用などを紹介する。

●一九九五年から管理人を置き登山者を世話したが、天気の良い年の夏は六百人もの登山者が宿泊台帳に記入するほど増加した。

ついに拡張ないし新築を計画するに至り、山小屋建設委員会が設けられた。

●改築内容Ⅱ面積約五〇平方メートル、収容人員二十四名、ビバーク用施設は存続、古い小屋はユングフラウ鉄道の責任で下に降ろし、山岳博物館として再利用。

●資金計画Ⅱ建設費用二四万二〇〇〇スイスフラン、費用の半分はガイド組合より出資、あとはユングフラウ鉄道の寄付金のほか、一般支援者からの寄付金四万スイスフラン、銀行借入金四万二〇〇〇スイスフランなど。

神々の座のふもとをのんびり歩く ネパール・ヒマラヤ・ トレッキング9日間

関空(大阪)発着チャーター便利用

日本エアシステムの直行便で行く

出発日 ①10/29②11/23③11/5④11/9⑤11/16
⑥12/21⑦12/24⑧12/28⑨3/15⑩3/22



ALPINE TOUR SERVICE 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪/☎06-6444-3033 名古屋/☎052-581-3211 福岡/☎092-715-1557

となっている。したがって一般支援者からの寄付を予定している金額の半分(日本円で一五〇〜二〇〇万円)を目標にすることとして、発起人・渡辺兵力、山田二郎、村木潤次郎、大塚博美、松田雄一の五名で活動を進めることになった。

お願いする方々は日本山岳会内の有志、慶應義塾大学山岳部のOBの会である登高会員の範囲に限り、楨家は別途対応されるとのこととで、一応この募金活動からは外すこととした。楨さんのひそやかな応援で出来上がったというこの小屋の歴史を偲ぶとき、あまり大げさな宣伝や活動はしたくないというのが発起人一同の考え方である。その点で多数の会員の方たちのお気持ちを損なったこともあるかと思うが、どうかご了承いただきたい。

そして五月初旬、募金依頼書の発送、六月末日締め切りを予定していたが、ようやく全体の整理を終わったのは七月末であった。事務的な雑事手続きは山田二郎が担当し、整然かつ順調に終わったことを付記したい。

募金結果

寄付いただいた方は日本山岳会

並びに登高会の有志計二百五十名に達し、望外のご厚意を得ることができた。八月中旬、諸手続きを終えて、金二九〇万円(三万九五〇四スイスフラン)をグリンデルヴァルト案内人組合理事長W・エッガー氏宛送金した。

この計画に対し尽力しておられたS・ブラバンドさんは七月十一日、百三歳で天寿を全うされた。謹んで哀悼の意を表するとともに、この新しい小屋の完成式は九月二十二日に催されたことを付記してお礼の報告としたい。

カナダの山小屋生活と自然保護

芳賀 孝郎

ご存知のとおり昨年八月アルパータ山登頂七十五周年を祝って、日本山岳会はカナダ山岳会と共同で記念登山と祝賀会を開催した。

日本からの七十余名の参加は、五つのグループに分かれてカナデアン・ロッキー登山をした。われわれの仲間十八名は、カナダ山岳会のウイラーハット(山小屋)に五泊してバルーパーストレイル、ア

ボットリッジトレイル、グレンシャークレストトレイル、アバランチクレストトレイルのハイキングを毎日楽しんだ。

ウイラーハットは、カナダハイウエーのロジャーパーパスから車で十分くらい、駐車場から徒歩八分程の便利な場所にある。標高一二五〇呎の針葉樹林に囲まれたハットは、一九四七年に建てられたものである。日本の山小屋と変わりない木造の二階建てである。二階は、台所炊事場と大きなマントルピースのある食堂兼居間がある。二階は、廊下をはさんで両側にマット敷きの寝室がある。収容は三十名である。トイレはハットから離れた場所にある。即ちアウトハウスである。

この小屋には水道の設備がなく、水は近くの川から汲んでくる。私たちは食後の食器や鍋を当番で洗った。台所の流しに、熱湯の入った桶が用意され、あらかじめ汚れをふき取った皿やスプーンをその中にいれ、ゴム手袋をした手でさっと洗う。流れ作業で、次に別の桶の熱湯に消毒の役目をする漂白剤をほんの少量入れて、食器をくぐらせてゆすぎ、あとはふきんを

使わず、自然乾燥させる。流しには炊事および洗った水を流してはいけない。食事に使用した汚水と食器を洗ったお湯など(グレイウォーター)は、バケツに入れて小屋の外にある指定されている水捨て場(ろ過装置)に捨てる。無駄のない水の使い方と処理の仕方では清潔に食器を洗い、川も汚さないこのカナダ方式に感心した。朝、川で歯を磨く時も、顔を洗う時も、グレイウォーターは直接川に流さないよう注意を受けた。

こうしてこの山小屋の生活では、カナダ山岳会のボランティアやガイドたちに見習い、川を汚さない自然保護の大切さを再認識しながら過ごした。そして「不便なことが自然を守るためには欠かせないことであり、そこに何ともいえない心地よさを感じた。

カナダから帰って、昨年十二月カナダ山岳会会長、マイク・モーターマーご夫妻を日光の光徳小屋に案内した。会長は率先して台所で気さくに洗い方をしながら、「この小屋は電気があり水道もあり、お湯も出る。光徳小屋はハットではなく便利なハウスだね」と、都会にない生活するのがハットラ



イラスト 芳賀淳子

イフなのに、と言外に言われているようであった。

カナダの山小屋の水質汚染に対してのきめ細かな神経の使い方は、私には印象深かった。登山後、カナダ山岳会幹部との懇談会で自然保護担当の副会長に「カナダでの自然保護の最重点は何ですか」と質問した。答えは、「自然保護の基本は森と川を守ることである」であった。森を守ることが美しい川を守ることであり、川を守ることが水を汚さないことであると話してくれた。

自然保護の基本である森と川を守る意識と姿勢を持って実際に行動しているカナダ山岳会の自然保護レベルの高いことはよくわかつた。

た。が、それに較べ自分のことをいうと、私自身は森と川を守る意識が足りないと思反省した。そして、例えば日本の山小屋でグレイウオーターの取り扱いがカナダのようにできるだろうか考えた。できないとは思いたくない。

英国山岳会(AC)

を手本として一九〇五年に創立された日本山岳会が設立百年を迎えようとしている。カナダ山岳会も二年遅れての誕生である。どちらもACに倣ってその根底に流れる精神は変わらない。そう考えると、カナダができるものは日本でもできると信じたい。

登山についても、自然保護についても、人が見ていようが、見ていまいが、基本的には個人の問題である。私自身、自然保護について自分に厳しくありたいと願っている。

カナダの山小屋生活を経験して、自然保護活動の基本は、個人の意識と行動によるものと改めて知らされた。

メンヒ・ユングフラウ連登

松隈 茂

二〇〇一年八月十六日の午前八時三十分、ユングフラウとロートタールホルンのコルにあるロートタールザッテル(三八八五m)の懸垂氷河の端部から、イタリア系スイス人ガイドのニコラ(三十二歳)と、今年六十二歳になった私の二人は、粉雪の舞う中をユングフラウの頂上を目指して再出発した。

まず左手の雪稜を北北西に十分弱登ると、雪面の傾斜が急になり右、左にトラバースして岩場に到達した。そこから高さ一・五mほどのポールが七、八本立っており、各々のポールの先には直径が一〇センチほどの楕円形の輪がつけられていた。下から三番目のポールまでは連続登攀であったが、それから先しばらくはセルフ・ビレーし、ニコラが上のポールに到達して確保状態に入ってから私が登り始める形を数回繰り返した。頂上近くの岩稜からは連続登攀で午前九時二十二分、雪面の頂上に立つことができた。

そこではまず写真を撮り、ビス

ケットを食べ、炭酸を抑えたりペラを飲んで十分以上もいてから、今度は私がトップで下り始め、途中で懸垂下降やニコラをビレーしたりしながら、十時にはロートタールザッテルに戻ることができた。そこでデポしていたザックを背負い、ハイピッチで長い行程を経て、ようやくユングフラウ・ヨッホの建物が見えるなどらかな雪面で小休止した。ヨッホに着いたらコーラを飲みたい、否ビールがよいのでは、などの冗談を言ったりしてペースを落とし、達成感に浸りながら十一時三十分にはスワイ

山旅総合カタログご請求下さい(無料)

キリマンジャロ(5892m)登頂とサファリ 11日間

出発日: 12/3, 12/24, 2002/2/8

料金: 545,000 円より (成田発)

航空会社: KLMオランダ航空 リーダー: 日本より同行します

確実に登頂していただく為高度順応日を設け、ゆっくりと歩きます。アムステルダム経由でキリマンジャロ空港へ直行するのコンパクトな日程です。

アミューズトラベル株式会社

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-22-2 新宿サンエービル B1

TEL 03(5325)1256 FAX 03(5325)1258

大阪 06(6456)3366 名古屋 052(588)5617

広島 082(502)2525 福岡 092(414)5566



メンヒの頂上で (2001年8月15日)

ンクス・シュトーレンと呼ばれるトンネルに入った。観光客で混雑した土産品を売る店近くのカウンターで結局コーラで乾杯し、ラウターブルネンの駐車場においてきた車でウオーレンの村に帰るというニコラと別れた。

この日の早朝、四時四十分にはメンヒス・ヨッホ・ヒュッテをわれわれ日本人登山者九人は、スイス人やフランス人ガイド六人と六パーティーを組んでバラバラと出発した。ぼんやりした月明かりの中にユングフラウの露岩が、まるで葉っぱを蓄えた木々のように見え、幻想的であつた。

ガイドのハンスルディがスフィンクス・シュトーレンで観測の仕事をしているので、われわれのストックをそこにデポしてくれ、ピッケルに持ち替えて再出発した。

それから幅二〇センチから一センチのクレバスを十二回ほど越え、六時二十分に懸垂氷河の端部を目前にしてわれわれは初めて克蘭ポンを着けた。十分後にクレバスを越えるときは、ニコラの指示でラストの私がループにして持っていたザイルの後部一五メートルを全部解いて、張った状態にした。

それからわれわれは、ロートタールホルンの直下近くの懸垂氷河の下部を一〇センチほどトラバースした。ようやく八時二十分にロートタールザッテルに到着した。三パーティーがそろったところでガイドたちが協議し、天候悪化の兆しがあるので一週間前の富士登山の疲れが残るN氏と疲れが出た女性二人はガイドのトーマスが連れて下山し、ヨハンとKさん、ニコラと私が登攀を再会した。

ユングフラウ登頂前日の八月十五日、午前九時四十分、メンヒス・ヨッホ・ヒュッテに待機していたわれわれ日本人登山者十二名に、

ユングフラウ・ヨッホ駅から上がってきたガイド六人が合流し、三人ずつのパーティーが生まれ、メンヒ登攀を開始した。

ニコラ、N氏、私の三人がパーティーを組んだが、N氏と私は昨年の七月三日にメンヒ登頂を試み、三九〇〇メートル地点でブリザードと雷に遭って退却、今年が二度目のチャレンジであつた。

ニコラ、N氏、私の順序でザイルを結び、十時二十分にはロボット雨量計の横を通る。昨年登攀を断念した雪稜上方の岩場は昨年より十分早いペースで通過した。急傾斜の雪稜ではポールに一二センチのシュリンゲを使ってビレーした。頂上付近に至り、雪底が張り出た箇所をどんどん進んだ。雪底に窓が開いたすぐ横を通過する時は、肝を潰すような気持ちでピッケルのスピッツェを極力右足の近くに刺すようにしたうえで、バランスを保たねばならなかった。

ようやく十二時二分に頂上に立つ。写真を撮りあい、行動食をとって十二時三十分になり始め、十三時五十分雨量計の横を過ぎ、十四時二十五分にメンヒス・ヨッホ・ヒュッテに帰着した。

不思議な地面模様

新井 浩

昨夏、西北ネパール国境稜線を探索した時だった。ラプチェ峠(五〇一八メートル)の南西七キロにある無名峰(五四七〇メートル)に登った。

高度五一〇五メートルの地に池を見出し、そこにACを張り登山基地とした。この池の北のゴルが分水嶺で、その先の北側がチベット領だという(後に地図を精査すると国境はまだ北寄りにあると判明)。ネパール国境は氷雪のグレートヒマラヤそのものとの一般的認識は、ここでは当てはまらない。大地のうねっているチベット高原の高みに過ぎないのである。

この池を挟んで左右に巨大な隆起した丘があり、この丘は南の大地へ下がり高原台地に和しているのであつた。丘と表現してしまつたが、茶褐色の何もない荒野の北の果ては、それなりに山脈を形成し、南に尾根を張り出している。木や緑がなく、瓦礫の丸みを帯びた尾根なので、つい丘と言ってしまうのである。

二つの尾根の源にあたる凹みに



池の端でキャンプ 左遠方は5652mの無名峰

雪解け水をたたえているこの池は、紺碧の色であった。主力メンバーは約一時間かけて一周してきた。ラプチェ峠に出るには池を通り過ぎコルに出て、右尾根を東へ大きく回りこむのが一番楽な最適ルートと判断された。しかし右尾根を直登し、北のピークを究めてきた偵察のシエルパによれば、このピークからカイルス、マナサロワール湖が見えたという。峠探索の案は葬り去られ、翌日はこのルートを探ることになった。

しばしの憩いで、池からの流れで顔や足を洗う。非常に冷たい水だった。なお、池の岸边には湿生

の植物が見られ、乾燥の激しい地ではあるが、干上がることはないようだった。後に、このような天に最も近い高地にある池を幾つも見た。周りには高山や氷河、残雪はなく、どこからきた水なのか、蒸発しきらないのはなぜか、疑問が生じたのである。

翌朝はおじやの朝食をとり、いつものとおり八時の出発。支度のできた者からばらばらと登り出す。偵察済みの右の馬鹿尾根は、丸みを帯びた長大なもの。石ばかりの斜面でどこを歩いても変わりなし。各自はてんでんばらばらのルートをとる。三十分も登ると、池は下に小さくなり、オレンジ色のテントは見えなくなった。ガラ場を登りきると、やや斜面のゆるい肩みたいなどころに至る。

この斜面で本題名のとおり不思議な地面模様遭遇したのである。まるで日本の田圃のように四角に区切られ、全体はほぼ碁盤模様である。一区画は三〇四四方、畔道は二〇〇三〇センチの岩石が並び、盛り上がりつつあるのである。区画の内面は細かい土砂状で、泥土に見えないこともない。この自然の土木工事には目を見張ったの

であった。

十時過ぎ頂上に立つ。蓼科山の山頂みたいな乱雑な巨石の積み上げピークだった。そこには大ケルンが建立されていた(平板状の石を重ね、四角柱にし、高差は二メートル)。初めて覗いた北のチベットの領には、青黒いマナサロワール湖が横たわっていた。二〇〇の彼方である。カイルスは白い基部を見せるものの上部は雲の中だった(八〇〇先)。西のナムナニ峰は黒雲の中で姿を見せてくれなかった。どうやら今いるこのピークは、このあたりでは抜群の見晴台とわかる。

目的のラプチェ峠は東方に連なる、はるかに低くたなびく山並みあたりかと思われた。横筋一本の残雪ラインが目につく。この無名峰のすぐ東側は急峻な落ち込みであった。

これ以上前進は不能と判断し、景色に満足して引き揚げることにした。ケルンにカタ(白布)を捧げ、記念撮影を行う。主力のテント帰着は十二時過ぎ。私はひとり離れて西のコルを目指した。西側の肩の斜面に降り立つと、朝とシエルパが心配して追いかけてき

6,000m以上の1,215峰を全て所収 世界初の精密登山地図 完成!!

宮森常雄 著 (ヒンズークシュ・カラコルム研究会)

カラコルム・ヒンズークシュ
Mountaineering Maps
of the KARAKORUM
& HINDU-KUSH
by Tsuneo Miyamori
登山地図 B全判地図13葉

[付]カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究 (宮森常雄 雁部貞夫 共著)

A4 変型判・上製美装ケース入 385ページ

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

国内外の多くの登山家・探検家による最新情報を刻み込んだ世界で最も詳しい登山地図がついに完成! 全て経緯度を位置付け、既登峰・未登峰を明示。氷河地帯の知りうる限りの情報も満載。別冊山岳研究では貴重なパノラマ写真に高度と山名を添えて掲載。現地言語による地名山名研究と併せてヒマラヤ全城の知識を提供する。

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

たので、軌道を修正して池に下り立った。遅れてテント着は十三時半。途中の岩場でリンドウ科のトウヤクリンドウを見つけた。花筒の先端は固く閉じられていて、何やら寂しげな風情であった。しかしこの高度に花を見出し、ひとり感動するのであった。

さて、帰国後読んだ次の二冊から今回の不思議現象についてほぼ見当がついたようだ。ご批判をいただければありがたいと思う。

『極北シベリア』 福田正巳著
『山の自然学』 小泉武栄著

(ともに岩波新書)

問題を解く鍵は「永久凍土」「構造土」であった。高度五〇〇〇以上の寒冷環境にあるチベット高原は、地下一〇〇メートルにわたって永久凍土が



俳句

月の山研

勝田 房治

黒木濃き六百山に月登る

存在している。われわれがキャン普した池は、その底に地表面近くに永久凍土があつて、下層への水の浸透を防いだり、温度変化に基づいて水を供給したりしていると理解されるのである。湖水が手がちぎれるように冷たいのも当然であろう。不思議な地面現象は構造土と呼ばれるものである。地表面の砂礫が凍結・融解を繰り返してゆくうちに、ふるいにかけられたようになつて創り出された地面の模様である。亀甲土、条線土、アイスハンモック、階段状構造土などのタイプがある。私はかつて北上高地でJAC岩手支部長から亀甲土を指し示されたことがあるが、自然にできたとは思えないきれいな模様であつた。しかし、日本のものは可愛らしすぎる。逆にチベット高原では規模が大きすぎるので、また違った物理現象が働いているのかもしれない。

渋沢登喜子著『劔岳』を読む

名越 礼子

六月に劔岳に行く、と言つたの

が機縁となつて『劔岳』という自費出版本を贈られました。著者は渋沢登喜子さん(実業家、民俗学者であつた渋沢敬三氏夫人)です。ご長男を丈夫に育てたい、という思いから登山を始められ、次第にグレードアップして、ついに劔岳を目指すようになります。

そしてとうとう昭和十二年八月、小学六年の長男を連れ、早稲田の学生さん、信州の二人のガイドとともに葛温泉を出発します。車で扇沢に入り、そこから登山を開始し、針の木峠を越えて針の木谷に下り、黒部川の吊橋を渡つて五色ヶ原に登り、ザラ峠、立山を経て劔沢小屋に着きます。そして長次郎谷を登つてついに劔岳に登頂したのです。

下りは別山尾根ですが、今のようになどないので、平蔵のコルにある「抱きまわり岩」ではザイルで確保され、岩を抱くようにしてトラバースします。小屋に帰着すると、源次郎さん夫妻が心配して外に出て待つていてくれて、何とお汁粉を作っておいてくれたということです。

『劔岳』は、この時の記録を後年思い出してまとめられたものです。

が、当時の山や山小屋の様子など大変興味深く感じました。私は著者の次女の服部黎子様をお願いして、JACの図書室に寄贈していただきました。

同時に寄贈していただいた『遙かな国、遠い昔』という本には、著者の年譜と、いくつかの山の記録が収められています。その中の「高水さんのこと」という短い文章は、初めての登山のときにあまりの不安で立ち往生しているところに、熟達者らしい登山者に出会い、過不足のないアドバイスをされて不安が解消し、山への気持ち自然に高まつていく様子が描かれています。登山を続けているものの、初心者への心得を教えられようでした。

警察白書を読んで

平野 友重

平成十一年版警察白書によれば、平成十年の山岳遭難事故の発生件数は一〇七七件、前年比二六二件増、死者行方不明者二百五十一人、前年比五十四人増となっている。白書の分析によれば遭難の特徴を、

夜雲まとい穂高が浮ぶ月明り

満月の闇に岨立つ霞沢岳

山研のテラスに移る月の宴

誘はれて月の宴の河童橋

瀬音訝へ月光返す梓川

山研の軒をかすめて天の川

短歌

モンゴルの山

伊佐 九三四郎

広き広きただ広き野に立ちにけり
空ゆく雲よ少年の日よ

草原に馬の群れみゆ風のこと谷よ
り丘へ吹きあがりけり

蛇行せる流れに沿ひてゲルのあり
画龍点睛地の星のこと

成吉思汗原駆けし国の山を往くゲ
ルの頭に蒼き月あり

蒼天の彼方に神の棲むといふ草の
褥にまじろみて知る

ツアガルゴル源頭に立てるファイテ
イン峰蒙中国境露境にも近く

①遭難者に占める中高年者の比率が高い ②体力、技術力が不足し、気象判断の誤り、装備の不備など登山の基本的な知識に欠けた遭難が多い ③遭難発生に対し自救能力のないパーティーが増えている ④ツアー登山では、ガイドの人員不足、経験不足によりガイド同行登山で遭難するケースが増加している、と分析している。

白書を通覧すると、登山人口に占める中高年者の数が圧倒的に多い今日の状況から、遭難者に占める中高年者の比率が高いのは当然の結果であり、遭難の背景を知るうえで大切なのは、中高年登山者を形態別に分類し、登山者層を類型化することが必要だと考える。

一口に中高年登山者といっても、十代、二十代の時から継続して登山をしていた者、若い頃の登山を中断し、また復活して山に登る者、ここ十年ほどのブームの中で登山を始めた者、少なくともこの三類型に分類し、遭難者の実像を把握しなければ、遭難要因には近づけない。

②の指摘に対しては、登山者のあり方をメディアを活用した啓蒙活動に模索するしか解決法はない。

のではないだろうか。昭和三十年代、四十年代の時の登山ブームと今日の相違は、年齢増の相違以上に意識、登山姿勢に顕著な違いがあり、登山のスタイルさえも変質せしめている。

一番の問題は技術の移転だろう。かつての登山者は、山岳会に加入するか学校のクラブに所属し、先輩の指導の下に、段階的な登山の中で技術をマスターし、技術の移転が行われた。しかし現今の登山者は、仲良しクラブで山に入るため、登山技術の向上は望みにくく、技術もなく、経験も少ないままリーダーとして山に入るから、千変万化する自然に対応できないで遭難を誘発している。

技術の移転の課題は、社会人山岳会以上に部員数の激減している大学のクラブに年齢の断層を生み、技術移転不能の歪みが生じ、大きな事故に繋がる危険性を内包した喫緊な課題だ。

個人レベルで技術を見れば、山に入る以上少なくともガレ場が歩けるとか、トラバース歩行ができるぐらいは身につけるべきだ。また、自戒をこめた言葉だが、衛星などを利用した気象技術の向上が、

天気図による自己の予報能力を喪失させていることは間違いない。

③はパーティーのあり方と無縁ではない。かつての登山では、パーティーはパーティーの最終意思決定者のリーダーの下で、各人が各々役割分担をし、パーティー内に自己を位置付け、パーティーは一体として機能していた。

しかしヒマラヤ登山が殷賑するとともに、パーティーのあり方が変質し、自己責任と自己完結性の名の下にパーティー行動を消失させた。ヒマラヤのような超難度な山で、かつ技術的体力的に一流の

ワインを直輸入しています

主にフランスはブルゴーニュのワインを中心に輸入しています。こだわりの無名ドメースを発掘!! 今、ワイン界に新風を送っています。SO2の少ないピュアなおいしいワインを、毎年フランスに行きドメースから直接買いつけています。素晴らしいおいしさです。ぜひお試しください。全国発送いたします。ホームページをご覧ください。
<http://www.winedou.co.jp/>
トップコンテンツのマキノレポートは山とワインのレポートです。メールマガジンもよろしく。

マキノ酒店有限会社 牧野 菊生
(会員8299番)
千葉県印旛郡富里町日吉台5-10-7
TEL: 0476-93-2200
FAX: 0476-93-7548

●日本ソムリエ協会関東支部ワインアドバイザーコンクール入賞 ●フランス食品振興協会(ソベクサ)認定コンセイエ(小売店のソムリエ) ●ワイン総合研究所公認名譽ワインマスター

人間の集団では、登山活動は個人の問題であり、自己責任の下で山対個人でいい。が、日本の山程度で、しかも体力の劣る中高年登山者はパーティー行動で互いに裨補しあい、登頂の喜びを共有する——日本人の甘えの構造の中に登山の楽しみを知る——中高年の登山には、登る時と降りる時は一緒にの、かつてのパーティー登山の形態が望まれる。「各人が自己のペースで、自己責任の下で登山をする」という小西政継氏の言葉はヒマラヤ登山の世界での至言だ。

④は私が指摘するまでもなく旅行社の登山分野への参入である。十分な準備も、登山経験もない若いツアーガイドに引率させているなど、山を知らないまま営利を優先させている姿勢に問題がある。登山で一番大切なことは、最悪の気象状況を予測し、それに対応できる心構えで山に入ることだ。その基本的な姿勢が欠如したまま登山を「旅行」として取り扱う自然認識の甘さが事故を招いているといえる。

過去五年間の死者行方不明者を見ると、平成六年から九年までは二百人前後で推移しているが、平

成十年になると二百五十一人と大幅に増加している。これは体験的推論だが、十年程前に登山を始めた人たちが、一〇〇〇級、二〇〇〇級の中、低山に登っていたのが、山に自信をもち三〇〇〇級の山や雪山に入りだした結果だろ



イラスト 真田幸俊

う。一〇〇〇級、二〇〇〇級の山と三〇〇〇級の山では山行時間が異なることもあるが、決定的な相違は、三〇〇〇級の山は岩稜帯の山だということだ。中、低山ではスロープがあるとはいえ、やわらかい土の道は足への負担が少なく、足をリズミカルに動かせるの

に、岩のゴロゴロする高山の道は疲労しやすく膝を酷使し、バランスをとりながら不規則な運行で足を運ぶため疲労度は倍以上だ。何年も山に登り、持久力をつけ、これでどここの山でもと思い、三〇〇〇級の山に入った結果がこの数字だ。

遭難事故の報道を読むと、登山歴一〇〇年と輝かしい数字が掲載されているが、登山は年数以上に内容が肝心だ。一般の登山道ばかりを歩いて小屋泊まりで登っていたのでは、何年登ってもベテランとは言えず、山を知っているとは言えない。山は時にはブッシュをし、時には夜歩き、また時にはシュラフ一つで山中で眠る、夜の冷気を肌で感じ、風の音を耳にし、夜中の不気味な鳥の声に身体を震わせ朝の太陽に感謝する、その自然との会話が千変万化する山の姿を認知し、危険を察知する動物的勘を養ってくれる。

私は登山者という言葉を使わないで、好んで「山ヤ」という言葉を使う。山ヤという言葉には、単に山に登る人という以上に、山になじみ動物的勘を備えている、そんな思いを込めて自称している。

実際、山を歩いていて、これが道かどうかの判断は、何となく人が歩いた気配がある、その何となくが、とても大切だということを体験が教えてくれた。

私は長い間単独行をしていたが、誘ってくれる人がいなかったわけではない。パーティーで山に入るには、リーダーが技術はもとより人間的にも信頼できる人でなければ、リーダーと景仰できないからである。また、パーティーはリーダーひとりが優秀なだけではトラブツタ時対処できない。ある程度メンバーをそろえなければ万一の事故に対応できないのである。

ヒマラヤ登山に限らず、国内の山でも互いに信頼関係もないまま営利、非営利を問わず公募方式のパーティーが多く、しかも一、二回その山に登ったことがあるというだけでリーダーを務める昨今、遭難事故の増加は当然の帰結で、白書が指摘する「パーティーに自救能力が欠如している」の言は、登山の根元的姿勢を問われているといえる。

この白書を読み、私は私がリーダーと認める人とその仲間たちに感謝した。

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

庄田元男・著

『日本アルプスの発見』

明治期在日外国人の事績研究の第一人者が、浩瀚な知識と多様な視点から「両洋文化の交流」(副題)を語ったエッセイ集。登場する欧米人は外交官、軍人、化学者、思想家、文学者、芸術家、宗教家等等。彼らが「主として本業以外の分野」で残した多岐にわたる業績は往時の紳士階級の懐の深さを偲ばせ、その伝統は著者自身にも脈打っている。

われわれが最も興味を抱くのは「わが国の近代スポーツ登山の端緒」を開いた人々だが、本書の四割近くを占める「ウェストンの憂鬱」と題した章では、読者は登山

史上の新知識のみならず、誠に人間臭いウェストン師にお目にかかるはずだ。

行き届いた調査に裏打ちされ、目配りと勘所をつかんだ多彩なライトモチーフ、それを滋味あふれるエッセイに調理する筆の冴えは天下一品。既知の話も巧みなヒネリと初物の加味で新鮮な読後感を呼び起こす。

ファンファーレを吹き鳴らした本だ。
(平井 吉夫)

二〇〇一年四月 茗溪堂発行
四六三ページ 三千八百円

山寺仁太郎・著

『甘利山』

南アルプスの前衛に位置する鳳凰三山のさらに前衛である標高二〇〇〇坪内外の山々の群れ。甘利山を中心としたその地域を、山梨県韭崎に拠点を置く山岳会が一九二四年に誕生した。登山の対象としての南アルプス北部の開発と保全にこの会が大きな貢献を行ってきた。筆者も白鳳会の中心人物として、郷土の山々への愛情を支えとして、甘利山周辺の歴史に深くかかわってきた。

本書は地元の人誌『中央線』

に二十年にわたって発表された文章の集成である。山と人と自然を語る文章の格調と香りが一級品の趣を持つ。

冒険的な登山の対象とならなかつたので、甘利山周辺の山々は地元に住民たちの憩いの場でもあった。人間味に満ちた伝説に山岳地帯の郷土文化の粋を見る思いがする。登山と行政のかかわりを語る部分も見逃せない。鳳凰三山の登山史と、一帯の峰々の名前についての詳細な文献的な資料と考察は、官尊民卑の弊を鋭く批判して説得力がある。

ときにユーモラス、ときに自然の喪失を憂えて詠嘆する。郷土の山への思いがこもる好著。

(宮下 啓三)

二〇〇一年三月 山梨日日新聞社発行 三九四ページ 二千八百円

橋本廣／佐伯邦夫・編

『富山県山名録』

富山県下五百八十五座を網羅した重厚な山名録が出版された。カラー写真六十四点に加え、一山一山に特徴が一目でわかるモノクロ写真などが添えられ、その高さ、

自然、文字、歴史と民俗、所在地、山名の由来、別名異名、登山記録、コースタイムが書き込まれている。郷土の山を知りつくし、惚れこんでいる九十九人衆の執筆者からなる力作である。一つの壮大な文化事業として結実しているといってもよいだろう。

筆者は昔、冬山縦走で毛勝三山の猫又山経由、赤谷山、白萩山、池ノ平山、小窓ノ王、三ノ窓、剣岳への北方稜線をたどったことがあるが、代表編集人は「編集を終えて」で、越中の山では中級山岳が忘れられたままになっている。半分以上が道のない山……と語っている。藪の埋まった残雪期の中級山岳は、現在も探検心をくすぐる原初の魅力を保っているといえる。踏み荒らされた百名山にない大自然の息遣いがそこにはある。個性的、創造的なスペースが広がっている。JAC会員向きの対象といえまいか。

本書は百周年に合わせて進められている『新日本山岳誌』の編集にも大いに参考に資する内容といえる。

二〇〇一年六月十日 桂書房発行 三五六ページ 四千八百円

(村井 葵)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

富山支部

播隆祭と高頭山登山

富山支部恒例の行事「播隆祭」が五月十三日に富山県大山町河内（播隆上人誕生の地）において開催された。

播隆上人は槍ヶ岳開山の祖として世に知れ渡っているが、大山町の生まれと知る人は意外に少ない。富山支部では支部結成三十五周年に合わせ、昭和五十八年五月八日に播隆上人顕頌碑を上人の生家である中村家の跡地に建立除幕した。以来毎年五月には、今は廃村となった旧河内ゆかりの方々とともにこの碑前広場で播隆祭を挙行してきた。したがって今回は第十九回

目となる。

昨年は熊野川沿いの道路が通行止めのため開催できなかったのですが、今年は久しぶりに懐かしい顔ぶれにお目にかかることができた。四年前に植樹した創立五十周年記念のオオヤマザクラの木もすくすく育っている。

祭壇の準備も整い、今年米寿を迎えた会員浜田文二氏（顕頌碑の施工者）の祝詞で式典が始まる。

上人の末裔にあたる中村家や旧河内の方々に続いて支部関係者が玉串を捧げた。神事が終わると、参加者全員がゴザの上に車座となつて懇親会に移る。これが楽しみで毎回参加している人も多い。支部長の挨拶の後、かつて分校の教員として河内の住人たちと関わりがあった前田英雄さん（越中史壇会会員）が講話をされた。

熊野川の上流に高頭山という二一〇㍑の双耳峰がある。播隆碑から少し上流の発電所脇に登山口があり、十年前、県内の有志が頂上まで登山道を伐開した。以来播隆祭終了後に高頭山に登るのが恒例になった。五月にしては少し強すぎる日差しの中、参加者の一部が山頂を目指す。この時期シャク

ナゲの花が見られたりして入山者が多いのだが、この日は地元新聞社のカルチャー教室の中高年の団体も登っており、頂上は満員となった。遅れて頂上に到着したわれわれは、例年になくブナの芽吹きが遅れて見晴らしのきく山頂の大雪山でザツクを開け、播隆祭のお供えの御霊（みたま）をほおばつた。

（山田 信明）

信濃支部

ミセス・ウェストン祭

八月五日、ウェストンの妻、エミリーさんをたたえる第五回ミセス・ウェストン祭が戸隠高原のミセス・ウェストン記念碑前で開催された。

戸隠村主催の碑前祭には、小倉茂暉評議員、小倉董子会員はじめ田畑真一会員、信濃支部員六名を含む百三十名近い参加者が集った。

ミセス・ウェストンが夫とともに外国人女性として初めて蟻の塔渡りを越え、戸隠山から高妻山に登ったのは、日本山岳会が創立（明治三十八年＝一九〇五）される前年の明治三十七（一九〇四）年八月のことであった。

式典が開始される直前から激しい雷雨に見舞われ、式典用のテントの屋根にも大量の雨水があふれ、一時は開会に影響が出るかと思われたが、式典は予定通り十一時から始まった。国歌吹奏、イギリス、日本両国旗と戸隠村旗を掲揚、小倉董子会員ら来賓により記念碑に献花、ミセス・ウェストンを偲び「遙かなりミセス・ウェストン」をガールスカウトが献歌。主催者の横川欣一村長が「雨らしい雨が降らず猛暑が続いていたが、エミリーさんが恵みの雨をもたらしてくださり、本当にありがたい。また今回から主宰団体にガールスカウト日本連盟が加わり、戸隠牧場の活動施設などを開放してくださりありがたい。今後は、女性の立場でミセス・ウェストン祭を盛り上げていくことを期待している」と挨拶した。

式典終了後、全員がガールスカウトの講堂に移り、ガールスカウト手作りの料理で昼食会が開催された。ガールスカウト日本連盟会長が「長い間戸隠村にお世話になっており、ミセス・ウェストン祭に協力させていただくことになりましたのでよろしく」と挨拶した。

Sanken Life

登山嫌いのはずが……

管理人 木村 太郎・弥生

「上高地で働いているくらいだから、山がお好きなんですね」とよく言われます。しかし、実は私(弥生)は小学校5年生の時に山で人生最初の挫折感(!?)を味わった人間なのです。

当時、私は富山県に住んでおり、学校の遠足で立山登山をしました。小柄な私の歩幅は引率の先生のペースに合わず、頂上直下100m地点で文字通りのびてしまったのです。「ここからは行きたい人だけが頂上に行きなさい」と遠くで先生の声。「絶対、行かない」と思ったものの、その場に残ったのはクラスの中でもごく

わずか。

休憩している間に元気も回復し、ふと頂上を見上げると、皆が顔を真っ赤にしながら、でもなにやら満足そうな表情で降りてくるのが見えるのです。なぜかとおきのモノを自分だけが見損なったような「シマッタ!」という気分になったものです。

その立山登山以来どうも山には不信感イッパイ。未だにその思いは根強く残っており、その後の山登りでは毎回必ず「きつともものすご〜くしんどいに決まっている!」と疑心を抱きつつ歩いてしまうのです。

しかし、上高地にきてからというもの、シーズン中の休みを利用する1~2回の登山を、妙に心待ちするようになりました。山研管理人2年目のあの「地獄の奥又白池山行」でさえも、もう1回くらいなら行ってもいいかな、と思ってしまうのです。

もしかしたらそれは、山好きな太郎さんの作ってくれるおにぎりや豚汁の効果かもしれませんか…。

今回から記念講演が午後の部となり、参加の会員は小倉評議員のヒュッテに押しかけて懇親会となった。小倉評議員から信濃支部会

員の参加に対し、お礼と「地元の会員によりミセス・ウェストン祭を盛り上げてくださるようお願いしたい」との挨拶があった。董子

会員の手料理をいただきながら、早乙女会員の乾杯で和やかな酒宴となる。久しぶりに参加した河西会員と佐々木会員は四十年ぶりの再会に感激。三井、横山会員も加わり、山行の思い出や近況報告など、山麓清談が続く。地酒と心づくしの料理に全員が満足して散会となった。

(金子 誠吾)

秋田支部

山谷薬師・院内薬師詣で

角館地区三薬師のうち、山谷と院内の二薬師を支部山行として七月十五日、十六名の参加者を得て実施した。

早朝、国道四六号線を経て西木村山谷集落に至り、林道途中にある登山口より登る。数日前からの降雨で山道は水浸し。沢沿いの道をつめ、不動の滝を経て東側の尾根に取り付く。

混合樹林帯をしばらく登るとよく整備された送電鉄塔保安道となり、ナンバー一四〇の鉄塔に着く。少し先の分嶺線に出ると視界が開

け、麓の集落が望まれた。ここから右手の平坦な道を行くと、大岩のある山谷薬師に着く。登山口より二時間ほどである。大岩を背に祠があり、中には薬師様が鎮座している。穴のあいた小石に名前を記して、病氣平癒などを祈念したものが奉納されていた。

檜内川河川敷公園で昼食をとり、次の目標である院内薬師(院内岳)に向かう。上院内より院内川上流を目指し、大蔵神社跡地に駐車。祠があり「辰子姫立像」が安置されている。

ここから林道を植林地へと進み、この先院内峠まで二十五回のつづら折りの急登が続く。峠の展望台で小休止、眼下に広がる静寂の田沢湖を眺望する。ここにも薬師様の祠がある。院内岳へ近年切り拓かれた道を登って、木立に囲まれた山頂に着いた(登山口より二時間)。

帰路、林道入口にある「辰子姫生誕の地」を訪ねて姫の墓石を拝み、地元温泉「くりおん」で汗を流して散会した。(高橋 忠雄)

今年もさげん会で会いましょう

アメリカにおける登山助成金—基金 (GRANTS)

日本山岳会は海外登山基金を設定して、毎年2〜3団体に助成を行っています。

そこで参考になればと思い、

アメリカにおけるシプトン・ティルマン助成金、ポーラーテック・チャレンジ助成金、

アメリカン・アルパイン・クラブ3団体における

2001年の助成金—基金 (GRANTS) の実績をまとめてみました。

アメリカの多様性、若手クライマーへの支援、

パイオニア的なチャレンジに対する評価の一端を垣間見ることができます。

特に、アメリカ山岳会の各分野への幅広い貢献は100年の伝統を感じさせます。

海外委員会理事・中村 保

(人力) を使ってCugnot Ice Piedmontに横断する。次に半島南部の東側のPrince Gustav Channelをシー・カヤックを漕いで移動する。さらに未踏のDetroit Plateauへ登り、反対側をReclus半島に沿って下りCharlotte Bayに至る。Gerlache海峡を南に漕いでParadise Harbourに向かう。

5. 東カラコラム・Arganglas Rangeの探査と登攀:

Chris Bonington 他数名

アメリカ・イギリス・インドの合同隊。8月下旬に東カラコラムの未踏の山域を探査し、3つの主要なピーク、6,789、6,544、6,389mの初登頂を試みる。最後にArganglas Rangeの初の横断をして別のルートを経て帰途につく。

(中村注: インド・メンバーの隊長はヒマラヤン・ジャーナル編集長Harish Kapadia氏。同氏はこの隊は小規模でプライベートな隊であると言う。Arganglasについては宮森地図No.12参照)

6. 東南チベット・Kangri Garpo Rangeの探査と登攀:

John Nankervis 他3名

拉古氷河 (Lhagu Glacier) を探査し、氷河をとりまく5,600—6,600mの無名峰の初登頂を試みる。10月—11月。

(中村注: Nankervis氏はNew Zealand Alpine Clubの会長。この計画は中村が提供した情報にもとづいて立案された)

ポーラーテック・チャレンジ 助成金—2001

Polartec Challenge Grant 2001

Banff International Mountain Festivalにて発表。スポンサーはポーラーテック繊維を造っているMalden Mills Industries, Inc.

1. 南極半島シー・カヤック遠征:

Graham Charles, ニュージーランド

北部Hope Bayからスタートし、ノン・サポートで長距離南に水路をとる。野心的試み。

2. パキスタンOgre 国際隊:

Rolando Garibotti, アルゼンチン他

シプトン・ティルマン助成金—2001

GORE—2001 Shipton/Tilman Grant

ゴア・テックスの発明者、W. L. Gore & Associates, Inc. が支援する2001年のシプトン・ティルマン助成金\$30,000受賞の対象として、45の候補の中から下記の6つの計画が選ばれた。選考の基準は、シプトンとティルマンの遠征哲学と探検の精神 (ライト・エクスペディションで世界の僻遠の地、未踏の山と海を目指した) を体現する企画にポイントが置かれたと、当事者は言う。

1. 世界で5番目に長いエニセイ (Yenisey) 川の

完全初下降: Colin Angus 他3名

エニセイ川はモンゴルのHangayn山に源を発し、北に5,500 km 流れシベリアを通過し北極海に注ぐ。遠征の最も挑戦的な部分は上流部の急流地帯で、カヤックで通過する。途中、地理・民俗・動植物の調査をする。出発は4月中旬。

2. モザンビークの花崗岩のタワー登攀:

Andy Donson 他4名

アフリカMozambiqueのNampula州、Malawi湖の南端から東300kmにある未踏の花崗岩の岩峰に挑む。この岩塔群は南アフリカの2人のクライマーによって目をつけられたが、彼らは探査できずに終わった。塔の高さは500~1,000m。2つ目の対象はMlema3東壁 (800m) の初登攀。ボルトを使わずフリー・クライムで登る。この岩塔は1998年に南アフリカのベアが初登しているだけ。

3. 中国・Kang Karpo (梅里雪山) 登頂:

Charlie Fowler 他1名

アルパイン・スタイルで最高峰の初登頂を狙う。梅里雪山一周のトレッキングもする。11月に基地となる徳欽にはいる。

(中村注: Charlie Fowlerは中村の知人。梅里雪山の最高峰の登山は雲南省と徳欽県により禁止されている。この事実を選考者は知らないのであろう)

4. ノン・サポートで南極半島を初横断:

Jay Watson, Peter Bland

47フィートのヨットToolukaでケープ・ホーンから半島最北端のケープ・ベイに航行する。ここで下船し、ソリ

(7788m)の未踏の北西稜を登攀。

13. エクアドル 2001 川下りの冒険 (River Odyssey):
Matt Terry, アメリカ

Terryはエクアドルで多くの川を探検し初下降に成功している。2001年の計画はアマゾン南部とNapo Valleyを調査し、自然美を破壊する大規模なダムと金鉱山の開発に反対し、Napoの水源を保護するための運動を展開する。

14. ヒマラヤのスキー横断:

Seb Mankelow, 英国

2人のチームが冬季にインド北部のZaskar HimalayaとPir Panjal山脈を横断する。遠征隊は軽装備で予め用意された食料デポの間をテレマーク・スキーで凍結した川を移動する。

15. K7の未踏の南壁: Jimmy Chin, アメリカ

K7は外国人に初めて開放された地域にある。南壁経路の登攀に成功すればこのピークの第2登となる。Chinと彼のパートナーは氷雪と岩壁登攀の熟達した技量を生かして速攻登山を行う。

16. 北極—6,200マイル北極圏横断:

Giles Elkaim, フランス

North Capeとベーリング海峡をカヤック、スキーおよびトナカイのソリで繋ぐ。Elkaimは6,200マイルを単独で移動する。成功すれば初の大西洋から太平洋への北極横断となる。

17. Thule遠征—グリーンランドの完全一周:

Lonnie Dupre, アメリカ

2001年、ポーラテックは再度Dupreのグリーンランド完全一周のスポンサーとなる。この2人組の遠征の最後のステージは現代の冒険、文化の相互作用、100年昔のロバート・ペアリーの探検との継続性を考える上で多に貢献するであろう。DupreはMelville Bayに犬ソリで行き、そこからカヤックで南に向かう。

18. アムネマチンでの冒険:

Jane Michel Asselin, フランス

スキーヤー、パラグライダー、スノーボーダーのフランス人ベテラン・グループが中国・青海省のチベット高原北東部にある聖山アムネマチン (6,282m) に赴く登山と巡礼の旅。

アメリカン・アルパイン・クラブ 2001
The American Alpine Club 2001

アメリカン・アルパイン・クラブ (AAC) は最近50,000ドル以上の助成金を若手のクライマー、山岳会、先鋭的な遠征隊に提供した。80以上のクライマー、研究者、探検家からAACに応募があった。これらの助成金はLyman Spitzer氏の遺贈やHelly Hansen および REI の法人会員のサポートを含むAAC会員の寄付による基金で賄われている。(The American Alpine News, Vol. 10, Number 234, Summer 2001より)

A. Lyman Spitzer Climbing Grants — \$27,000

この助成金は世界の山の挑戦的な難ルートの初登攀、あるいは2、3登を狙う小規模なチームに金銭的な支援をして先鋭的なクライミングを促進することが目的。27,000ドルが下記の隊のリーダーに与えられた。

1. Mike Bearzi (コロラド): アルパイン・スタイルによ

強力な国際隊。Ogreサウス・ピラーをアルパイン・スタイルで狙う。成功すればOgreの第2登となる。

3. 東チベット易貢蔵布曲 (川) の初下降:

Jed Weingarten, アメリカ

親子の冒険。ヤルン・ツァンポーの支流、イゴン・ツァンポーをノン・サポートで12日かけてポ・ツァンポーの合流点まで下る。ユニークな計画。

(中村注: 中村に現地の川の状況について問い合わせがあった。易貢蔵布曲沿いに外国人が下った記録はない。入域許可が問題)

4. 冬のマカルーからK2 2000~2002:

Krzysztof Wielichi, ポーランド

Wielichiは2000年にマカルーを登り2002年にK2を登る。これで彼は「5つの最高峰の冬季登攀」のプロジェクト全体を完了する。Wielichiはすでに1980年エヴェレスト、1986年カンチェンジュンガ、1988年ローツェ (単独) に登っている。

5. ネパール Peak 43 の初登頂:

Mich Fowler, 英国

ネパールのこの未登の6,000m峰に挑む冒険は美学である。4人のチームが西側に開放されたばかりのPeak43を登攀する。

6. スブツェ東峰—アルパイン・スタイル:

Steve House, アメリカ

3人のチームが挑戦。かれらは1999年にデナリのCzech Directを60時間のアルパイン・スタイルで登攀に成功している。

7. カナディアン・ロッキーの単独徒歩スキー横断:

Kanya Tanaka, 日本

ゴールは2,000km先。冬季に単独でWaterton Lakes National Park から北へBritish Columbia 北部のSummit Lakeに至る。

8. 2001メンルンツェ国際遠征隊:

Carlos Buhler, アメリカ

まだ初登だけしかなされてないMenlungtse (7181m) の未登の北壁に高度に技術的な新ルートを開く。Buhlerは、1998年にChangabangで成功した3人のロシア人と再びチームを組む。

9. キジル・アスカの南東壁の初登攀:

Sean Isac, カナダ

Kizil Askerはキルギスタンと中国の国境線上にある。南東壁は巨大な花崗岩のフェースを2分する氷のガリー登攀が鍵である。2人のクライマーがこの1,300mの壁に挑む。

10. パタゴニア・ダーウィン山脈遠征:

Simon Yates, 英国

余計な費用を切り詰めて、小さなグループが僻遠のパタゴニアDawin Rangeにヨットで行き、Mount Boveの東稜の初登攀に挑む。この地域は気象条件が世界で最悪。厳しい天気をおしてのセイリングとクライミング。

11. タクラマカン砂漠横断:

Mike Libeck, アメリカ

“巳年の遠征 (The Year of Snake Expedition)” と名づけて、2人の男がタクラマカン砂漠を西から東へ1,400km徒歩で横断する。サポートに駱駝を使う。2人は大岩壁登攀から水平の試練を目指す。

12. ラカボシ 2001:

Manu Pelissier, フランス

ヨーロッパ・パキスタンのチームがRakaposhi

6. **Eleanor Haresign (英国)**: チリ・パタゴニアのLeones氷河の生成運動の研究。
7. **Derrick Lampkin (アリゾナ)**: 高山の積雪状態を確認する光学測定器の改良。
8. **Bill Putnam (アリゾナ)**: UIAAプログラム支援。
9. **Clint Rogers (カリフォルニア)**: ネパールのマナン地方、Nyishangteにおける社会経済的な変化の調査・研究。
10. **Lizzy Scully (ユタ)**: バルチスタン(Baltistan)の女性文化と生活様式研究。
11. **Nicholas Seneca (シンシナチ)**: 遺伝子におよぼす高度の影響の研究。
12. **John Hoesen (ネバダ)**: ネバダ、Great Basin国立公園の水河の年代調査。
13. **Emanuel Voyiazakis (イスラエル)**: キリマンジャロの表水の微生物学的調査。
14. **Michael White (オランダ)**: クライミング・危険度の高いリクリエーションの満足度の研究。

E. Mountaineering Fellowship Fund Grants—\$5,000 (春)

この助成金は、より困難を求めて新しい挑戦をする25歳以下のクライマーを支援する。毎年秋と春に支給される。今春は下記のメンバーに合計5,000ドル授与された。

1. **Lynnea Anderson (カリフォルニア)**: ポリビア・アンデス、キミサ・クルス(Quimisa Cruz)のグレード5、クラック・ルートの高度な登攀。
2. **Timothy Ciosek (アラスカ)**: アラスカ、Kichatna Spire南稜/壁の登攀。
3. **Patience Donahue (コロラド)**: 南Howser Tower山塊のミナレットのフリー登攀。
4. **Aaron Hjelt (モンタナ)**: セント・エリアス国立公園、University PeakのBuhlerルートを速攻登攀。
5. **William Linkroum (コロラド)**: パキスタン、Hindu Rajの無名峰の未踏の北東稜を登攀。
6. **Zack Martin (コロラド)**: メキシコ、Ceniga付近で未踏の特徴のある山で高度なフリークライム。
7. **Tom Sardy (アラスカ)**: アラスカ山脈(Alaska Range)のRooster Combの登攀。2つの南稜の間を登る。
8. **Zachary Shlosar (アラスカ)**: アラスカ山脈のRooster Combの新ルート開拓。
9. **Dylan Taylor (ワシントン)**: パタゴニアのフィッツ・ロイ、Pier Giorgioにアルパイン・スタイルで新ルートを開く。
10. **Matt Walker (ワシントン)**: Ruth Gorgeで探検的な登攀とMt. Dickeyの岩壁に新ルート開拓。
11. **Aaron Martin (カリフォルニア)**: ブリティッシュ・コロンビア、セルカーク山脈(Selkirk Range)の探検とBugaboos' Howserにおける初登攀。
12. **Zack Smith (ユタ)**: 一同上—

F. Scott Fischer Memorial Conservation Grants—\$350

この助成金は世界の山の環境保全に貢献する隊に提供される。2001年は下記の遠征に与えられた。

INTI 2001 Expedition (MD): ペルー、コルディエラ・ブランカのNevado Chincheyでの学生によるゴミの清掃活動。

るチベットのギャチュン・カン (Gyachung Kang) 東壁の初登攀。

2. **Nils Davis (カリフォルニア)**: アルパイン・スタイルによるパキスタンのShinga Charpa北稜の登攀。
3. **Steph Davis (ユタ)**: パキスタンの未踏のトランゴ・タワー (Tarango Tower) の南西稜。
4. **Scott Decapio (ユタ)**: 中国のキジル・アスカ (Kizil Asker) 東南壁の初登攀をアルパイン・スタイルで狙う。
5. **Steve House (ワシントン)**: クンブ・ヒマラヤ (Khumbu Himalaya) のヌプツェ (Nuptse) 東峰南壁に新ルートを開く。
6. **Chad McFadden (コロラド)**: パキスタン、ヒンドゥ・ラジ (Hindu Raj) の無名峰の初登頂。
7. **Brady Robinson (MN)**: パキスタン、チャラクサ谷 (Charakusa Valley) のK7南東壁の初登攀。
8. **Steve Swenson (ワシントン)**: カラコラム、Kondus Valleyのリンク・サール (Link Sar) の探検的な登攀。

B. Lyman Spitzer Conservation (環境保護) Grants—\$5,000

この助成金はクライミング・エリアの環境の保護・保全計画を実施している団体・クラブに与えられる。2001年は約5,000ドルが下記に提供された。

1. **Randolph Mountain Club (NH)**: トレイル (山道) を保守・整備する要員のために宿泊設備を建設。
2. **Talkeenta Ranger Station, Denali National Park (アラスカ)**: Mt. マッキンリーにおける人間の廃棄物処理のため使用済みコンテナを調達。
3. **AAC Oregon Section (オレゴン)**: トレイルの建設の都会のクライミング・エリアの改善。

C. Helly Hansen Mountain Adventure Awards—\$7,500

AACとHelly Hansenが共同して世界の山々に赴く登山家や探検家に資金と衣料を提供する。チーム・リーダーはそれぞれ2,500ドルと衣料を受取る。

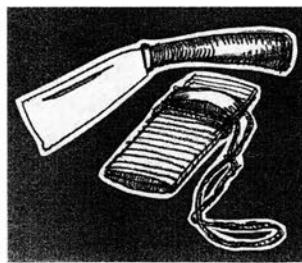
1. **Steve Grapel (MN)**: アラスカ・ユーコンMount VancouverのWalter Woodの初登ルートをトレースする。
2. **David Hanning (ワシントン)**: アラスカのUniversity Peak南壁の初登攀および初下降。
3. **Elizabeth Scully (ユタ)**: パキスタン、カラコラムのShipton SpireとCat's Earの初登頂。

D. The American Alpine Club Research Grants—\$8,500

AAC Research 助成金はAACが認定する科学調査プロジェクトを対象とする。今年は8,500ドル以上が次の計画に提供された。

1. **Mark Allen (ワシントン)**: 北カスケードのMagic Mountain GneissのTectonic構造の調査。
2. **Thomas Besom (NY)**: 南米アコンカグアの考古学調査。
3. **Keith Daellenbach (オレゴン)**: ジュノー氷河・氷原の写真撮影。
4. **Jeffrey Deems (モンタナ)**: 積雪の温度変化による形状変化の研究。
5. **Philip Evans (アリゾナ)**: 相関関連する2つの植物の化学的特性の研究。

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆中高年登山者の高所登山およびトレッキングを科学的に考える

科学委員会

趣旨 最近増加している中高年登山者の、海外における高所の登山(五〇〇〇メートル以上)およびトレッキング(四〇〇〇メートル以上)について、どういった心構え、準備で取り組むべきか、どういった問題が生じていて、それにどう対処すべきか、を科学的な視点で考察します。

対象者 若年時に基礎的な登山の訓練を受けず、中高年になって登山を始めて、相当の数の日本の山で登山を経験。次の活動の場を海外のかなり高い山に求めている人々を対象にしています。

日時 十一月十七日(土) 十三時三十分

会場 東京都高年齢者就業センタ

「シニアワーク東京」地下講堂(東京都千代田区飯田橋三・一〇・三 Ⅷ〇三・五二一・二三〇七)

基調講演「運動生理学の視点から必要な心構えと準備を考える」

講師 山本正嘉氏(鹿屋体育大学助教授)

パネルディスカッション

◎現地での引率者としてのコメント
トⅡ貫田宗男氏(株ウエック・トレック代表取締役)

◎医学的見地からのコメントⅡ
堀井昌子氏(平塚保健福祉事務所長)

◎ツアー経験者としてのコメント
入場料 無料(別途資料代五百円)

◆第十回「山を語る」

図書委員会

講師の豊富な体験をもとに、スロベニア・アルプスでのクライミングとスキーを、ヒマラヤ、欧州アルプス、日本アルプスを比較しながら、スライド映写を交えて語っていただきます。

日時 十一月二十日(火) 十八時三十分

会場 日本山岳会会議室

演題 スロベニアの登山とスキー

講師 ツベート・ポドロガル氏(登山家、元スロベニア・ナショナル・オリンピック・スキーチーム代表)

◆岳友の山を旅する

96年同期会

今回の山は、滋賀県の最高峰一三七七メートルの伊吹山です。山麓の民宿に一泊し、翌日登ります。案内役は関西の同期会員である望月栄子さんと奥克彦さん。過去に参加したことがない方も大歓迎です。

期日 十一月十七日(土)十八日(日)
連絡先(詳細など) 遠山元信(Ⅷ〇四八・七七・一〇〇五三)
望月栄子(Ⅷ〇七二六・七三・三三七二)

■会員異動

物故

石田 喜八 (九八九二〇一・七・三十一)
島崎 昌巳(二二五七七)〇一・八・八
川北 仁 (六九七〇)〇一・八・一八
退会
山石 幸子 (二二九一五)

■訂正 九月(六七六)号一四

ページの写真説明で、筆者は右端となつていますが、左端の誤りでした。お詫びして訂正します。

◆編集後記◆

●九月号から会報「山」の活字を大きくしています。新聞各社も活字を大きくし始める中、会報の文字も大きくしました。周辺の感想は八月号以前と比べるとかなり見やすくなったと好評ですが、ご意見があればお寄せください。

●今月号の巻頭の「英国山岳会の見解」もそうですが、山を巡る環境はとみに狭くなってきています。これまで海外の山岳団体との交流の面は、登山情報、遠征情報などの収集・共有化が主でしたが、今回の問題提起は重いテーマだと思います。また環境問題やヒマラヤのゴミ問題なども各国の協力、連携が求められています。直ちに結論が出るテーマではありませんが、今後紙面で考えて行きたいと思っています。

(今村 千秋)

日本山岳会会報 山 677号

2001年(平成13年)10月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
ホームページ: <http://www.jac.or.jp>
Eメール: jac-info@jac.or.jp
発行者 大塚博美
編集人 今村千秋
印刷 株式会社 双陽社